

く札幌農学校を卒業して東京に居り、四方之進の死後直別へ来て、遺産の相続をすると同時に資産の処理に当った。

一方、慶（明治29年生）は四方之進とともに直別へ来て明治44年直別小学校を終り、大正7年6月、22歳で久野喜十郎を婿養子として迎え、一女喜美をもうけたが、大正8年12月に離婚した。

黒岩四方之進は生前の昭和2年に山林の一部を当時釧路直別で大きく木工場、薪炭業を經營していた池端伊太郎に売却しており、死後は宣光に農場の事業を継ぐ意志がなく、農業經營にも無関心であったため、結局全財産を池端伊太郎に売却し、死後1年10ヶ月余りの間に一切の財産を処分して東京に戻った。残された黒岩四方之進の夫人テツと娘慶は孫の喜美の小学校卒業を待って、昭和6年5月、27年間続いた黒岩農場をあとに釧路へ移った。

V. 直別部落の誕生

黒岩農場を買収した池端伊太郎は、農耕地の一部100町歩余を北海道庁に買い上げて貰い、山林については造材を行った。

昭和6年5月、黒岩テツらの引払った後、それまで小作をしていた中の10名が自作への転換を望

んで、今野務を先頭に小作解放運動を展開した。つまり、池端伊太郎が北海道庁に売却した土地に対し、民有未墾地として払い下げをして貰うということで、大津村役場・十勝支庁を通して積極的にこの運動が行われた。

柳屋敷勘吉・大場巳之吉・中井多三郎・二階堂貞作・三田龍五郎・福井義政・橋本重三郎・小林政一・平井政勝・渡辺卯之助、これら10名の熱心な運動が効を奏して、2戸分という土地の確保ができる、各々が自作農として再出発することとなった。昭和7年8月5日のことである。

このころは既に山林のほとんどが用材その他に切り出され、小径木は木炭にすることで、さしもの大密林も丸坊主となってしまい、池端伊太郎の木工場も閉鎖された。そして、この木材の切り出された約1,000町歩の農場山林は売りに出されるところとなった。

また、直別神社は昭和8年ごろ、部落の守護神として、先代の橋、川端氏らの協力により現在地に建立されたと伝えられている。

（浦幌町郷土博物館協議会長）

参考文献

河西支庁（1911）『十勝国産業写真帖』 帯広

十勝太のチャシ跡について

後藤秀彦

I

浦幌町十勝太地区は浦幌十勝川（旧十勝川。以下「十勝川」という。）川口に開けた漁業・酪農業を主産業とするさびれた集落である。

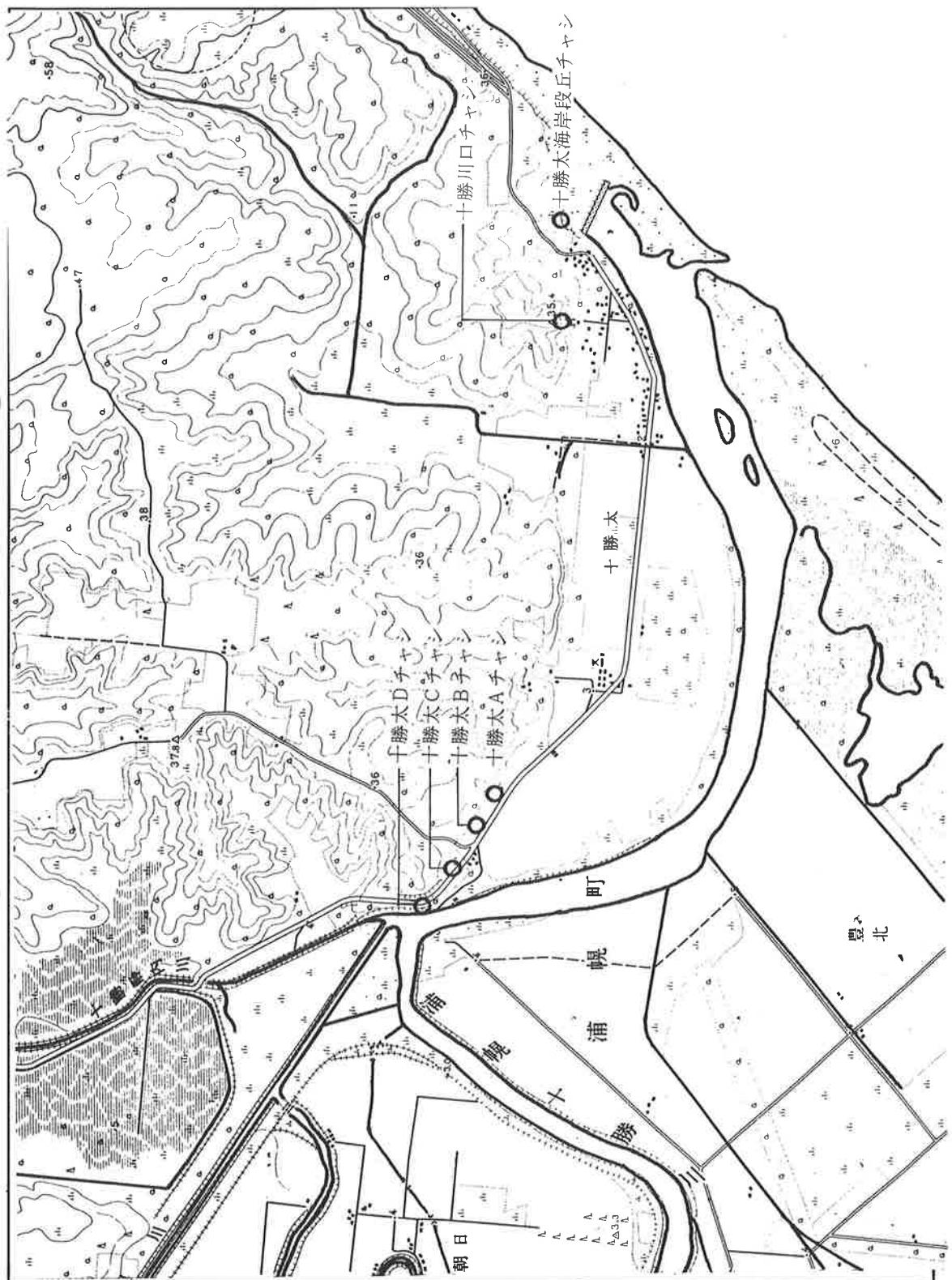
当地区は、古文書などにより江戸時代中期には既に開け、コタンの形成なども顕著であったことが知られており、さらに前時代の擦文時代の集落跡も多く、太平洋と十勝川を機軸とした生業体系の中で変遷してきた地区である。

この十勝太地区が古文書の中で最初に登場するのは、著名なオランダ商船カストリクム号の航海日誌および船員の証言記録においてである。1643

（寛永20）年、難破した同船が十勝沖に漂着し、同地のアイヌと接触した記録であり、地名についても明瞭に「Tacaptie」と答えており、この地が十勝川々口左岸集落「トカチ（プト）」を指すことに疑いはない。

また、これより先の擦文時代の集落は、十勝川北岸の河岸段丘上に連なって分布し、そのうちの一部は発掘調査も行われている。

当地の学術的な調査は、1934（昭和9）年ごろから斎藤米太郎によって始められた。この調査は、当時、大津村立静内小学校や十勝小学校で教鞭を取っていた米太郎が『大津村史』執筆のために行った遺跡分布調査の一環として実施され、後には



Map 1 十勝太のチャシ跡と周辺の地形
(この地図は国土地理発行の2分5千分の1地形図「十勝大津」を複製したものである。)

(この地図は国土地理発行の2分5千分の1地形図「十勝大津」

個人で「原始文化展覧会」も開催している。そして、この一連の分布調査の中で数多くのチャシ跡を発見し、その労作は『郷土先史民族砦趾』や『十勝川沿岸砦趾の研究』として結実し、この中で当地区のものとして6基のチャシ跡（図は5基分）をリポートしている（斎藤、1935）。

これらのすべてのチャシ跡は十勝川北岸に発達した河岸段丘上に形成されたものであり、十勝太コタン・十勝川・太平洋・後背地の林野を背景として構築されたものである。

この6基にのぼるチャシ跡の分布は、面積の割合に濃い分布状況を示すものであるが、現実的には十勝川口チャシ跡と十勝太Dチャシ跡（後藤、1980a・b）のリポートがあるのみで、その実体などについては必ずしも明かとはなっていないくらいがあるので、ここで一括して報告し、そのもてる意味などについて若干の考察を加え、先学諸氏のご批判を受けたいと思うものである。

II

さて、このトカチ（ブト）なる地名は、十勝管内でも最も古くから知られた地名である。最も古い「トカチ」の名は、現在の歴舟川流域のある箇所を示す『松前旧事記』に見える「戸賀知」であるが、十勝川々口の集落を指すものとみられるのは、前記した1643（寛永20）年のド・フリースらによるオランダ商船カストリクム号の航海日誌などにある「Tacaptie」である。また、その翌年に成立した『正保日本図』にも「トカチ」と見え、1697（元禄10）年の『元禄御国図絵』にも「とかち」とあり、少なくとも17世紀中葉にはかなり重要な意味をもった土地であったことが窺われる。

そして、18世紀に入ると1712（正徳2）年の『和漢三才図絵』、1720（享保5）年の『蝦夷志』、1726（享保11）年頃の『蝦夷商買聞書』、1731（享保16）年の『津軽一統志』、1781（天明元）年の『松前志』、そして1789（寛政元）年の『寛文拾年狄蜂起集書』・『寛政蝦夷乱取調日記』などに「とかち」・「トカチ」・「大とかち」などの名で散見され、さらに下って19世紀に入ると松浦武四郎の日誌などにも度々登場するようになる。

一方、十勝太Dチャシ跡が所在している箇所は往時「オベツコワシ」と呼ばれていたところである（後藤、1981）。当地名の初見は1800（寛政12）

年の皆川周太夫の『十勝川筋之図』（千葉、1964・田沼、1984）に見える「ヲベアシ」であろうと思われるが、松浦武四郎の『東蝦夷日誌』・『竹四郎廻浦日記』・『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』・『十勝日誌』などを併せ読んでみると、「人家多し」あるいは「人家九軒有」とあり、当時としては有数のコタンを形成していたことが明かとなっている。

現在は、この「オベツコワシ」も含めて「十勝太」と総称しているが、厳密にはこのオベツコワシから十勝川々口の間には『東蝦夷日誌』によれば「ワワウシ」という渡場があり、人家3軒があったとされ、『十勝日誌』などにも同様の記事が見られる。この「ワワウシ」の位置は、現在の十勝太神社通りを南下した十勝川べりと考えられるが、『十勝日誌』ではワワウシを指して「是則トカチ村とて本川口也」と記している。

また、下って明治期の記録を見ると十勝静内川と十勝川との合流点付近を「シズナイブト」、十勝太Dチャシ跡下の川沿下流方向を「コタン」、現在の十勝太市街（すなわち、往時のワワウシ）を「ブト」と呼んでいた（十勝小学校開校70周年記念祝賀協賛会、1976）。

以上の変遷から見ていくと、当地の人家などの配置は19世紀中葉にはオベツコワシとワワウシに、明治期にはシズナイブト、コタン、ブトにあったこととなる。このうち、シズナイブトのコタンについて『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』では「此処家三軒有」とし、さらにオベツコワシについて「元此上の高き處に土人小屋有りし」と興味ある事実を記載し、続けて「此処に土人の家九軒有」と述べている。すなわち、オベツコワシのコタンは以前は崖上にあったが、現在は崖下の十勝川べりに移ったというものである。そうすると前記した「コタン」はこのオベツコワシの後の姿と考えられ、往時には崖上の十勝太Dチャシと同一の面にあったと推測することができる。

次の「ワワウシ」と「ブト」は同一箇所を指すものであることは明瞭である。

こうして見てくると、十勝太地区は古くは「シズナイブト」・「オベツコワシ」・「ワワウシ」の3地点に分散して人家があったことになる。そうすると、シズナイブトに属するチャシ跡は現在のところ見出すことは出来ないが、オベツコワシ

に属するチャシとして十勝太A～Dチャシが想定され、ワワウシに属するチャシとして十勝川口チャシと十勝太海岸段丘チャシが想定されることになる。この配置はオベツコワシに4、ワワウシに2ということになり、1つのコタンに属するチャシは各々近接した関係となるのであるが、オベツコワシに属する方では少し違った意味合いをもつそうである。

III

ここで各チャシ跡を個別に見ていくことにしよう。まず、十勝太A～Cチャシ跡である。これらのチャシ跡は現在ではいずれのチャシ跡も壕の存在は不明瞭でよく判らない点が多いが、幸い斎藤米太郎の図が残っており、参考になる。この図によれば、これらの3基のチャシ跡はいずれも扇状に突出したテラスの基部付近に弧状の単壕を施したもので、同形態を呈しており、先に筆者が分類した（後藤、1982・1984）IV aに属するものである。この形態のチャシ跡は、近隣ではなく、十勝川中流域にまで遡らなければ見出すことはできない。また、十勝太DチャシはV aに属するチャシ跡で、VI aとともに十勝川下流域では他に見ることのできないグランドプランと規模をもつものである。このチャシ跡について斎藤米太郎（1935）は「自然砦」であるとしているが、わずかにではあるが壕の存在が認められ、人工のものであることに疑いはない。

最後に、十勝川口チャシ跡と十勝太海岸段丘チャシ跡であるが、前者は連結壕、後者は複壕を有するものである。これらチャシ跡は細かく見ていくと、十勝川口チャシは「ワワウシ」すなわち舟渡し場を中心に十勝川口からその上流方向を視野におさめるものであり、後者の十勝太海岸段丘チャシ跡は眼直下に十勝川々口を把えるものである。また、両チャシ間は各々ダイレクトに見通せる位置に構築されており、両者とも筆者分類のV bに相当するものである。

VI

ここで再び、話をIIに戻してみよう。前述したように、オベツコワシに属すると考えられる十勝太A～Dの4チャシ跡は、その形態や立地、グランドプランから2つに細別することができそうで

ある。即ち、十勝太Dチャシ跡と十勝太A～Cチャシ跡にである。こうした差違は、チャシ構築を計画した際の意識の差違と感じとれるが、その意識の差はその意識を支える社会的・自然的差違であったのだろうが、現在的にはその根底に流れるものは指摘しえない。ただ、近接しながら明かに異なったグランドプランなどを想定して造ったという事実のみである。

一方、川口に近い2基のチャシ跡はグランドプランは異なるけれども半円状の壕を組み合わせていくという点では共通しており、時期も比較的近接したものであろう。

V

以上、十勝太地区に所在する6基のチャシ跡について、概略的に私見を披瀝してきたが、6基のチャシが少なくとも2つのコタンによって維持していたことを明かにしてきた。こうした研究は古くは泉靖一（1952）の沙流川流域のイオル研究があり、近年では石狩川を対象とした本堂寿一の労作（1977）や天塩川を対象とした宇田川洋（1982）の研究がある。さらに、宇田川は全道を対象としたチャシの分析例を上梓している（宇田川、1983）が、これらの研究は最終的にはミクロの単位でコタン個々を検証し、チャシとのつながりを探っていくなければならないであろうが、そうした内容を知るに足る古文書を今後発見できるかは極めて悲観的であろう。

VI

最後に、本論をまとめるために抜書した「トカチ」あるいは「とかち」の出典名を列記しておきたい。

- | | | |
|-----------|---------|--------------|
| ①戸賀知 | 松前旧事記 | 1635（寛永12）年 |
| ②Tacaptie | 日本旅行記 | 1643（寛永20）年 |
| ③トカチ | 正保日本図 | 1644（正保元）年 |
| ④とかち | 元禄御国図絵 | 1697（元禄10）年 |
| ⑤トカチ | 和漢三才図絵 | 1712（正徳2）年 |
| ⑥トカチ | 蝦夷志 | 1720（享保5）年 |
| ⑦トカチ | 蝦夷商買聞書 | 1726（享保11）年頃 |
| ⑧とかち | 津輕一統志 | 1731（享保16）年 |
| ⑨トカチ | 松前志 | 1781（天明元）年 |
| ⑩トカチ | 蝦夷拾遺 | 天明期 |
| ⑪大とかち | 寛文拾年狄蜂起 | 1789（寛政元）年 |

集書

- ⑫とかち 寛政蝦夷乱取調 1789 (寛政元) 年
日記
- ⑬トカチ 十勝川筋之図 1800 (寛政12) 年
- ⑭とかち 東蝦夷地各場所 1808 (文化5) 年
様子大概書
- ⑮戸勝 蝦夷日記 1808 (文化5) 年
- ⑯トカチ村 久寿里場所大概 1809 (文化6) 年
書
- ⑰トカチ 蝦夷地名考并里 1824 (文政7) 年
程記
- ⑱トカチ川 日鑑記 1837 (天保8) 年
渡船
- ⑲トカチブ 東蝦夷日誌 1844 (弘化元) 年
ト
- ⑳トカチ 竹四郎廻浦日記 1856 (安政3) 年
- ㉑トカチ川 協和私役 1856 (安政3) 年
- ㉒トカチ トカチ場所支配 1856 (安政3) 年
人通詞番人稼方
名前書
- ㉓トカチ川 罂有日記 1857 (安政4) 年
- ㉔トカチ 東西蝦夷場所 1857 (安政4) 年頃
境取調書上
- ㉕トカチフ 戊午東西蝦夷山 1858 (安政5) 年
ト 川地理取調日誌
- ㉖トカチ村 十勝日誌 1858 (安政5) 年
- ㉗トカチ村 御組頭奥村季五 1858 (安政5) 年
郎様御廻浦之節
当詰合江差上候、
トカチ御場所諸
上留
- ㉘トカチ 近世蝦夷人物誌 1860 (万延元) 年
(浦幌町郷土博物館学芸員)

引用文献

- 泉 靖一 (1952) 「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」『民族学研究』16-3・4
- 宇田川洋 (1982) 「天塩川筋のチャシコツの分布」『北方科学調査報告』3
- (1983) 「チャシコツ分布の一分析例」『東京大学文学部考古学研究紀要』2
- 後藤秀彦 (1980 a) 「十勝川口チャシ」『日本城郭大系』1 北海道・沖縄
- (1980 b) 「十勝太Dチャシ」『日本城郭

大系』1 北海道・沖縄

- (1981) 「生剛という地名についての覚書」『浦幌町郷土博物館報告』18
- (1982) 「チャシの形態分類に関するメモ」『浦幌町郷土博物館報告』19
- (1984) 「北海道のチャシ」『北海道の研究』2 考古篇II
- 斎藤米太郎 (1935) 『郷土先史民族砦趾』
- 田沼 穂 (1984) 「十勝のアイヌ語地名考」『北海道を探る』5
- 千葉小太郎 (1964) 「寛政日勝道路考」『郷土十勝』4
- 十勝小学校開校70周年記念祝賀協賛会 (1976) 『とちぶと十勝小学校70年の歩み』
- 本堂寿一 (1977) 「石狩川流域のチャシコツ」『石狩川中流域の先史遺跡』

註1 十勝太A~Cチャシ跡については、現在では、その位置は殆どわからないのが現状である。Map1に示した位置は、斎藤米太郎 (1935) 『郷土先史民族砦趾』に示された位置と付された若干のコメントをもとに位置を推定したものである。

註2 本小論に掲げるべき各チャシ跡の地形図は紙数の関係もあり掲載できなかった。図については、次の報告を参照されたい。

宇田川洋ら編 (1985) 『北海道のチャシ集成図』I (道東北篇)

斎藤米太郎 (1935) 『郷土先史民族砦趾』

藤本英夫ら編 (1980) 『日本城郭大系』1

註3 オベツコワシ(コタン)とワワウシ(ブト)の境界はおそらくロラン川であると思われる。

1985年12月16日	印 刷
1985年12月20日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 木 村 旭	
発 行 所 浦幌町郷土博物館	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社	
北海道帯広市西7条南6丁目	